

論 説

## 作業工程に注目した農業部門における障害者就労の実態

竹 島 久美子 (地域資源マネジメント学科)  
香 月 敏 孝 (公益財団法人 えひめ地域政策研究センター)  
輪 違 典 子 (地域資源マネジメント学科・卒業生)

How handicapped people are working in agriculture section?

Takeshima KUMIKO (Regional Resource Management)  
Katsuki TOSHITAKA (Ehime Center for Policy Research)  
Wachigai NORIKO (Former Student of Regional Resource Management)

キーワード：農業・就労継続支援（B型）事業所・福祉的就労・指定障害者支援施設・介護施設  
Keywords：Agriculture, Work Support Centers for Continuous Employment (Type B), Welfare work, Designated Support Facilities for Persons with Disabilities, Nursing facility

【原稿受付：2022年1月17日 受理・採録決定：2022年1月31日】

### 要旨

本論文は、近年注目を集めている農業部門における障害者就労や介護施設における農作業について、障害者たちが施設職員たちと連携してどのように就労や作業をしているか、具体的な作業工程にまで踏み込んだ取り組み実態を把握したものである。対象は就労継続支援（B型）事業所「ゆいの里」による福祉的就労と、生活介護が必要な障害者たちが暮らす介護施設「こころみ学園」における農作業である。明らかとなった共通点は、多くの障害者が作業にかかわっているが、それぞれ関心があり得意な分野を担当できるように作業が細分化されている点である。一方、障害者および施設職員との関係で、ゆいの里は「働く仲間づくり」としての農業・農産加工が行われているが、こころみ学園は、生活を共にする「疑似家族のなりわい」としての農業・農産加工を取り入れている、という性格の違いがあることがわかった。

### 1. はじめに一障害者就労の諸形態一

近年、農業部門における障害者就労の拡大をめざした「農福連携」の取組みが活発となっている。障害者と農業・農村との関係は、図1に示したように、多様な内容からなっており、就労ばかりでなく、介護施設を中心に、治療、機能回復の場（園芸療法等）としての農業・農村の役割が期待されている<sup>1)</sup>。

農業分野における障害者就労は、一般就労、福祉的就労の2つがあるが、それぞれ表1のように分類できる<sup>2)</sup>。

一般就労は、障害者が通常の雇用関係を結び農業分野に就労するもの（規模の大きな農業法人に雇用されるなど）で、福祉的就労は、就労支援施設の利用者として障害者が農作業を実施し、その対価として工賃を受け取るものである。

これらのうち、従来からみられた形態が、アの農業経営者が障害者を雇用する、ウの農業者が行う農作業の一部を福祉事業所が請け負い、障害者が依頼された

作業を行うものである。

これに対して、新たな形態として、イ、エ、オは、障害者就労のために設立された農業事業体という共通の性格を持っており、図1に示した福祉型農業経営体ともいうべきものである。

イは、障害者を直接雇用することが難しい企業が、障害者を雇用する（法定雇用率を確保する）ために子会社（特例子会社）を設立して農業経営を行う形態である。農業も福祉も専門外の企業の取組みで、一般企業による農業と障害者福祉への同時参入といえる。

エは、農業から障害者福祉への参入である。園芸作など労働多投型の農業経営の場合、労働力の確保が難しい農業者が、福祉施設を設立することで障害者を集め、農作業を請け負ってもらう形態である。こうした事情から、同一経営者が農業と福祉事業（就労支援施設）を運営している場合が多い。

オは、福祉施設が農地を取得するなどして自ら農業生産を行う形態である。独自の販売・加工事業も組み

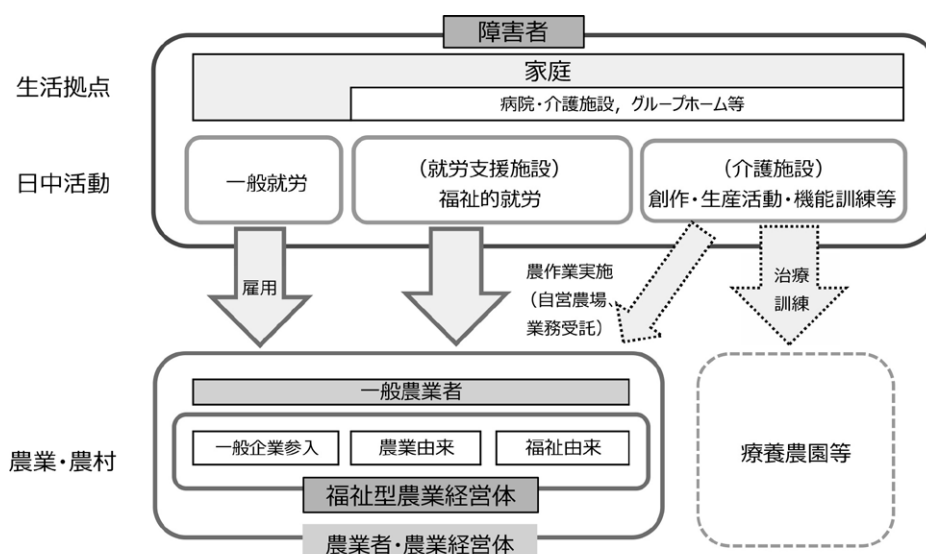


図1 障害者と農業・農村との関係（概念図）

資料：筆者作成。

込んだ本格的な農業経営もあれば、就労支援事業のごく一部の取組みの事例など、その幅は大きい。就労支援事業を行うにあたり農業以外の取組みが難しい農村部に立地する事業所を中心に、近年、増加している。また、農業に本格的に取り組んでいる事業所の一部では、就労支援を行っている農業部門を切り離して農業生産法人を設立している事例もある。

さて、こうした状況の中で、近年、福祉系および農業経済系の研究者を中心に、障害者就労を中心とする農福連携にかかわる実態把握が進んでいる<sup>3)</sup>。しかしながら、これらの多くは、研究手法としてアンケートや個別事例の実態調査に基づくものが中心で、様々な形態の取組の把握は行われているものの、いわゆる聴き取りに基づく情報収集にとどまっている点は否めない。障害者たちが施設職員と連携して、どのように就労しているか、具体的な作業工程にまで踏み込んだ取組実態の把握は、なおもって十分ではない。

また、これまでの研究対象は、主に、図1に示した一般就労の一部（特例子会社等）と就労支援施設を中

心とする福祉的就労に焦点が当てられている。このため、介護施設における取組実態の解明が十分に行われている訳ではない。介護施設における農作業の実施は、単なる就労機会の確保にとどまらない農業の持つ多面的機能の発揮にかかる内容を含んでいるとみられる。かかる点の解明に向けた取組実態の分析が待たれるところである。

#### 1) 輪違典子「農業に取り組む障害者就労施設の実態」に取り上げられた分析対象施設の概要

輪違（2021）は、農業部門における障害者就労の実態のうち、障害者福祉施設における取組を、就労支援施設、介護施設の双方を取り上げてまとめたものである。両者を比較することで、これまで十分に明らかにされて来なかった介護施設における農業就労の性格を際立たせている。

また、同稿は、筆者が実習生として両施設において経験した実習体験を基に整理されており、障害者（施設利用者）と施設職員とが織りなす日常がリアルに再現されている点で興味深い。

表1 農業分野における障害者就労の諸形態

一般就労（障害者が通常の雇用関係を結び就労）	
ア.	農業者が障害者を雇用
※イ.	一般企業が子会社（特例子会社等）を設立し、農業分野で障害者を雇用
福祉的就労（就労支援施設の利用者として障害者が農作業を実施）	
ウ.	農業者から依頼された農作業を福祉施設が請負
※エ.	農業者が福祉施設を設立
※オ.	福祉施設が農業を実施（発展型として福祉事業所が農業法人を設立）

注：※は図1の福祉型農業経営体（障害者就労のために設立された農業事業体）に該当する。

表2 農業分野における障害就労施設の2タイプ（事例）

施設名	ゆいの里	こころみ学園
運営主体 所在地	NPO法人 結の会 愛媛県宇和島市三間町	社会福祉法人 こころみる会 栃木県足利市田島町
施設分類	就労継続支援（B型）事業所 〔就労支援施設〕	指定障害者支援施設 〔生活介護施設〕
利用者数 （障害者）	37名（通所）	生活介護 105名、 うち施設入居支援 90名
障害の種類	知的、精神、身体の3障害で 精神障害の割合が高い	利用者の90%が「障害程度区分6」 （最も障害が重い区分）
職員数	16名（うち、パート10）	生活支援員 66名、世話人 12名
敷地面積等	37,192㎡（敷地）	5,820㎡（建物）、 3.6ha（ぶどう園）、2.0ha（山林）
作業内容	よもぎ栽培・加工、 和菓子・柑橘ゼリー等の食品加工、 農作業受託等	しいたけ原木栽培（原木運び等）、 ぶどう・ワイン生産（ぶどう園およびワイン加 工場）、洗濯等

資料：輪違（2021）表2-1、表2-5に基づき作成。

注：「ゆいの里」は2019年9月、「こころみ学園」は同3月時点の実態。

紹介された施設は、以下の2つである。

- ①「ゆいの里」（NPO法人「結の会」が運営する就労継続支援（B型）事業所、愛媛県宇和島市三間町、前身の共同作業所は1996年設立、2006年にNPO法人化）。
- ②「こころみ学園」（社会福祉法人「こころみる会」が運営する指定障害者支援施設、栃木県足利市田島町、1968年に知的障害者更生施設として開所、1980年に学園内に有限会社「ココ・ファーム・ワイナリー」を設立）。

それぞれの詳細は、表2のとおりである。

ゆいの里が該当する就労継続支援（B型）事業所<sup>4)</sup>とは、就労支援系の障害福祉3サービス（就労移行支援、就労継続支援（A型）、就労継続支援（B型））のうち、雇用契約に基づく就労が困難な者を対象とする事業所で、就労支援施設の利用者の7割程度と最も多いタイプである。雇用契約に基づく就労が可能なA型は2割程度、企業等への就労を希望する移行支援は1割程度を占める。

また、こころみ学園が該当する「指定障害者支援施設」は、その施設に入所する利用者について、主として夜間において日常生活の支援を行う施設入所支援とともに、日中の施設障害福祉サービス（生活介護、自立訓練、就労移行支援）を行う施設である。

ゆいの里は、就労継続支援（B型）事業所という意味では、多くの就労支援系施設がこの形態をとっている点で珍しいものではない。しかしながら、この施設の特徴は、就労事業として農業関連事業を中心に、3,000万円を超える事業収入をあげるなど、農業経営体として大規模な活動を行っている点である。

ゆいの里の2020年度の事業収支は図2に示したとおりである。就労支援施設の収支構造は、いずれの施設も、公的支援（図の下部分）として国からの給付金が施設職員の人件費や施設運営費に充当されることになっている。

一方で、それぞれの施設が独自に行う就労支援事業（図の上部分）は、事業内容と規模に応じてその収支のあり方は多様である。ゆいの里の場合は、この就労支援事業の規模が大きい。この事業収益（売上）から原材料費等を控除した収益から障害者（利用者）に支払われる「工賃」（障害者に支払われる報酬部分）も厚い<sup>5)</sup>。ゆいの里の1人当たりの月額工賃は、後述のように2.7万円程度とB型施設の全国平均（1.5万円程）を上回っている。農業事業を中心にこうした成果をあげていることが、ゆいの里が注目される所以である<sup>6)</sup>。

一方で、こころみ学園は、学園内に「ココ・ファーム・ワイナリー」を設立していることで、広く知られている。この施設では、設立当初から収益確保と障害者（同園では、「園生」と呼ぶ）の心身の健康づくりをめざして、葡萄としいたけを中心とした農作業を行っていた。葡萄の収益が不安定であったこともあり、ワインづくりが障害者の生活の自立につながるとの考えからワイナリーを設置した。ここでは、日本の葡萄からワインをつくり、自家畑では除草剤や化学肥料は一切使わず、醸造場での醗酵も天然の野生酵母や野生乳酸菌が中心である。こうした製法で独自のブランドを確立している点が特徴である<sup>7)</sup>。「ココ・ファーム・ワイナリー」は、こころみ学園から原料の葡萄を買い入れてワイン製造を行うほか、原木しいたけの買入れも行っている。2017年の同ワイナリーの売上は7億



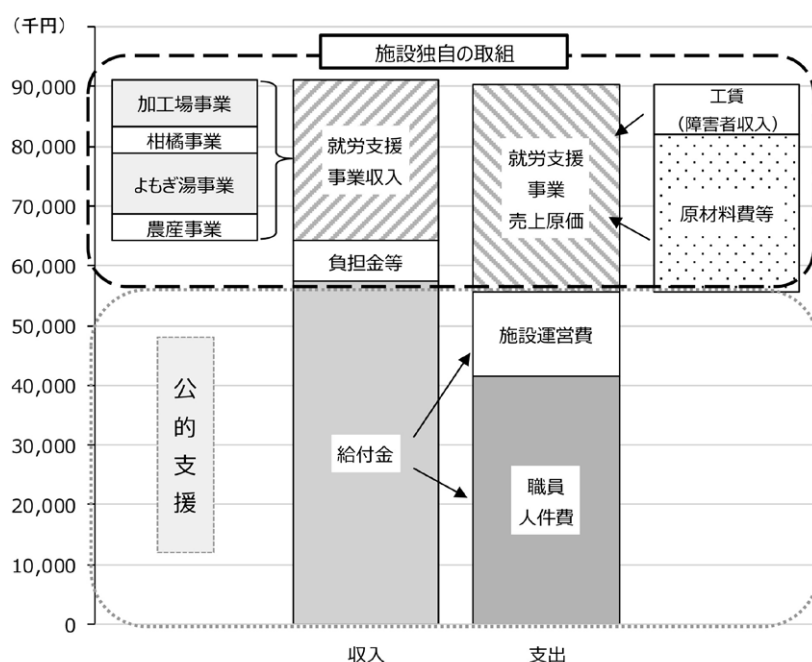


図2 「ゆいの里」の事業収支状況(2020年度)  
資料:「ゆいの里」事業報告書に基づき作成。

円に上っている。障害者施設に由来する最大規模級の農産企業といえる。

## 2. 分析対象施設での作業実態 —輪遣(2021)から—

### 1) ゆいの里

ゆいの里の就労作業は、図2に示した4本の柱からなっているが、このうち、よもぎ湯事業が単品としては最大である。菓子製造の加工場事業も総体として大きい。よもぎもち、スイートポテト、クッキー、ゼリーなど、多種の食品からなっている。ここでは、よもぎにかかる作業部分を輪遣(2021)から抜粋して引用、紹介する。引用に際しては、繰り返しや冗長な表現のほか、意味がとりにくい部分について、簡潔で分かりやすい表現に置き換えている(置き換えは、文意を損ねないように最小限にとどめている)。また、[ ]は捕捉説明である。

以下が引用部分である(よもぎ作業に参加した2019年7月の内容を中心とする記述である)。

#### ○よもぎ刈り取り・乾燥作業

この作業を行った利用者には、「外作業—よもぎ」の工賃、1時間あたり410円が支払われる。

利用者は、毎日送迎バスに乗って通所してくる。送迎バスは4便あり、宇和島市内便が2本、津島便、吉田便がそれぞれ1本である。バスは大体8時50分ごろ施設に到着し、それぞれ持ち場に分かれていく。

この日の作業は、9時ちょうどから始まった。参加

した利用者は12名いた。半数が精神障害者で、1名が脳性麻痺によって左半身が不自由な身体障害者であった。車の運転は職員とパート職員がおこなう。ハイエースと軽トラックに分かれてそれぞれ適当に乗り込み、畑へ移動する。車で移動するが、施設から遠いわけではなく、大体近い畑で2分、遠い畑でも7分程度である。[この施設は、耕作放棄地を借り入れてよもぎ栽培を行っている。]

畑に到着すると、皆手慣れた様子で作業に取り掛かる。まず、パート職員と、決まった利用者が、よもぎの畝の横に麻の紐を張り、根元から10cmくらいのところから横向きになぎ倒す。倒されたよもぎの紐の下、根元の部分を、職員が草刈り機で切っていく。この年のよもぎは、例年より少し小さい。寒春、梅雨時期の少雨が原因らしい。そうはいっても、だいたい1.2mほどの高さで、大きいものは2m近いものもあった。よもぎが切り倒されたら、残りの利用者たちが、自分たちの背丈と同じくらいの長さのよもぎを、抱えるようにして拾い束にして軽トラックの荷台に積み上げていく。地面に倒れているよもぎを拾うために、何度も膝を曲げ伸ばした。束状にしながらどんどん拾っていくため、重たいものを抱える力が常に必要であった。拾い集めるスタイルは利用者によって様々で、列の先頭に立って目立った大きなよもぎを拾う人もいれば、1番後ろをついていき、みんなが拾い忘れているよもぎを拾う人もいた。基本的には無言で集中して作業を行った。この日行った2つの畑は同じくらいの大ささで、だいたい1つの畑を刈り終えるために、30

分程度かかった。

作業開始からちょうど1時間、よもぎを刈り終わると、軽トラックの荷台によもぎを高く積み上げて、乾燥場〔施設内に設置〕へ向かう。この日はその道中で、町の商店でアイスクリームを買った。乾燥場に到着して、10時30分まで休憩をとる。その際、水を飲んだりアイスクリームを食べたりして、各々熱中症の対策を行っていた。このタイミングで、職員さんは施設に帰る。パート職員1名と利用者のみが乾燥場に残留。

休憩が終わると、パート職員の指示のもと、刈り取ったよもぎを乾燥機にかける前段として、泥やカビで汚れたり黄ばんだりしている葉を取り除く作業を行う〔以下、葉取り作業〕。乾燥場のなかには、パイプ椅子やミカン箱などがおいてあるので、各自落ち着く場所に座って作業をする。とある利用者は、地べたに座らないと集中できないので、多少床が汚れていても地べたにペタンと腰を下ろして作業を行っていた。また他の利用者は、音楽を聴いているほうが集中できるので、CDプレイヤーを持ち歩いて作業をしていた。〔葉取り〕作業を20分もすると、粉碎機、乾燥機にかけられる状態になったよもぎが溜まってくる。乾燥場には、粉碎機が2台、乾燥機が3台設備されており、それらを日によって交互に使っていた。

粉碎機によもぎを入れる作業は危険なので、毎回決まった利用者が行う。この作業を行った利用者には、「よもぎ粉碎」の手当てがつく。粉碎機の入り口に、よもぎを根元側からあてがうと、勝手にバリバリと機械が巻き込んでくれる。粉碎機の出口から出てくるチップ状のよもぎは、そのまま乾燥機の中に落ちるようにセットされている。乾燥機は、浴槽のような見た目で、縦1.5m、横1.5m、高さ1mくらいの大きさだ。1つの乾燥機に、生のよもぎを200kg入れることができる。乾燥機がいっぱいになると、電源を入れ、24時間放置、乾燥する。

〔葉取り〕、乾燥の作業は、11時半頃に中断される。昼食をとるために、一度施設に帰る。

昼食は、毎日パートの職員が2名で調理を行っている。施設で作業している利用者、職員が全員揃った状態で、食堂で食べる。食べる席は決まっている。食事は茶碗に盛られたごはん、ワンプレートに盛られた主菜、副菜、デザートであった。栄養バランスよりも、おいしさを重視して作っていると言っていた。本当に毎日おいしいお昼ごはん、午後からも頑張ろうという気持ちになれた。利用者の希望をできるだけ採用した献立にしているようだ。

昼食を終えると、少し休憩して、再び乾燥場へ移動する。13時から、作業開始だ。午前中の作業を続行しつつ、前の日に乾燥機にかけていたよもぎを袋に詰

める作業が始まる。乾燥した状態のよもぎを、手箕で掬い、2Lのプラ袋に10kgずつ詰めていく。よもぎを掬う人、ビニールの口を広げている人、秤をよく見て重さをはかる人、という風に役割が分担されていた。この日は、10kg×12袋が完成。完成した袋は、施設の倉庫に貯められる。この日の分を足して、倉庫の中には220袋貯まっていた。

別の日には、雨が降ったため、よもぎ刈り取り班も施設の中で作業を行った。乾燥よもぎが入った袋を倉庫から取り出し、それをさらに粉碎する前に、硬い茎の部分除去する作業を行った。机に乾燥よもぎを適当に取り出し、そこからひたすら茎の部分を取り除いていく。皆指で触るだけで茎部分をサッサと取り除いていた。手慣れた様子で、すごく器用だなと感じた。私は目で見ながらではないと茎か葉かを仕分けすることができなかった。

この作業に取り組んでいる利用者の月収を計算してみる。1時間410円の作業を1日に6時間したとして、20日間作業をすると、49,200円になる。工賃の使い方は人それぞれで、趣味に使っている人が多いようだった。例えば、先にも書いた音楽を聴くのが好きな利用者は、いいイヤホンを買おうと思っていると話していた。

#### ○よもぎ湯加工作業

この作業には、「内作業—よもぎ」の工賃、1時間当たり280円が支払われる。

前述した、茎を取り除いた状態の乾燥よもぎは、さらに細かく粉碎され、よもぎ湯に加工される。よもぎの室内作業では主に、不織布の袋によもぎの粉を入れる作業と、出来上がった製品をビニールの袋に入れる作業を行う。まず、不織布に入れていく作業には、知的障害の利用者が多く参加していた。ここにも1人パート職員がついて、一緒に作業を行っていた。この作業を行う前には、全員ビニールの手袋をし、作業帽の中に髪の毛をしまっていた。

作業の手順はこうだ。まず、テーブルの真ん中に、正方形の缶（おせんべいの大入り缶のようなもの）を置き、そこによもぎ粉をいれる。秤と薬包紙、不織布の袋を用意し、準備は完了。ひとつのテーブルに2、3人座り、真ん中の缶からよもぎ粉を12gずつ取り出し、袋に詰めていく。袋に詰めたら、こぼさないように注意しながら、テーブルの上に貯めていく。袋が貯まってきたら、袋詰めと並行してシーラーで袋の口をふさぐ作業を行う。シーラーは危険なので、この作業も粉碎機と同じく決まった利用者さんだけが行っていた。袋の口をふさぐと、よもぎ湯の完成である。ここからさらに、商品としてパッキングしていく。よも

ぎ湯を10個と、商品名の書いてある紙を、向きをそろえて丁寧にビニールの袋に入れ、これもまたシーラーをかけて口を閉じる。できた製品は一度段ボールに整理され、出荷を待つ。

### ○実際に共に作業をして感じたこと

ゆいの里の利用者は、皆自分の活動で工賃を得ていることを意識しながら働いていた。仕事をするということの意味がよく分かっている人が多いように感じた。これは単に障害の重度や種類の問題ではなく、施設のシステムがそうさせているように感じた。例えば、作業を行う部屋のホワイトボードに、誰にでも見えるように工賃表や手当表が張り出されている。また、食堂には、現在の施設の平均工賃(27,000円)と、目標工賃(29,000円)が掲示されていた。こんなにも工賃を意識させる福祉施設というのは珍しいのではないかと思った。そうすることによって、ひとりひとりが自分のできる最大限の作業をしようという気持ちになるし、難しい作業にも積極的に挑戦してみようという気分になるのではないかと考えられる。

さらに、難しい作業に取り組んでみたいという利用者を、職員がすぐにサポートして、やる気があるうちに挑戦できるようにしているところも印象的だった。ある日、よもぎの内作業をしている1人の利用者がシーラーに挑戦してみようという話になった。ドキドキしながら挑戦したところ、うまくできたので、職員がすごく褒めていた。さらに、ほかの利用者が一緒になって喜んでいて、その光景はすごくいい空気感で、いい「職場」だと思った。

ゆいの里では、利用者のことを「なかま」と呼ぶ。利用者、職員という立場は関係なく、それぞれできることは違うけれども、なかまみんなと一緒に仕事に取り組んでいるという気持ちになる呼び方だと感じた。それぞれのことは、皆「〇〇(苗字)さん」と呼び合っていて、ここにも利用者で職員の間には差をつけないようにしようという意図が感じられた。

このように、作業を通じて自分の成長を感じたり、作業に見合った工賃を貰ったり、やりがいを感じられるという点で、ゆいの里での農業は、就労継続支援(B型)事業所の目的である働く場の提供に十分貢献しているといえるだろう。

## 2) ころみ学園

ころみ学園は、生活介護系の施設であるので、日中の就労作業以外の生活支援の実態についても多くの実態が記載されている。

以下、輪違(2021)からの引用である。2018年12月および翌年3月の体験実習の様態である。引用の方

法は(1)のゆいの里と同様である。

### ○起床、清掃、朝食

ころみ学園の朝は6時の館内放送から始まる。生活指導員(以降、先生とする)が1部屋1部屋起きるように声をかけて回る。この時先生は男女合わせて7人。前日晩から宿直の先生が5人、朝番の先生が2人だった。

6時15分には全員が起きてるようにしたいのだが、起きない園生がほとんどである。起きた園生は自力で着替えをし、終わり次第自分が寝泊まりしている宿舎の清掃(床拭き)を行う。掃除をあまり理解していない園生のほうが多いので、汚れを見つけて拭くことができる人はほとんどいない。もう少し寝ていたいところを無理やりにでも起こされてしまうので、かなり不機嫌だ。

床に座り込む人、雑巾をもって不満を叫ぶ人、トイレ掃除清掃中にトイレのスリッパを投げる人もいた。先生方は車いすの園生を食堂に運ぶ。自分で動ける生徒たちは放置され、全く掃除にはなっていなかった。朝食の放送が掛かると、みな一斉に食堂に移動する。この時、先生方7人に加えて、日勤の先生方が出勤してくる。ここで行われる先生方のミーティングは手早く、手の空いている先生だけで行われているようであった。

7時半頃全員が着席次第、「いただきます」の号令がかかり食事が始まる。食事の量は人によって調整されており、歯がない人はミキサー食だった。お箸の持ち方がわからない人もいるが、基本的にスプーンなどを与えず、箸でどうにか食べるようにさせていた。6人班体制で、障害が軽度な園生が班長として各班に割り振られている。メンバーの中で、仲間割れや、突発的な喧嘩が起きた際は、次の食事から席が変更になることもあった。班長は、前掛けが必要な班員に前掛けをつけてやったり、食べ残しの無いようにお椀に残ったご飯を食べさせてやったりする。お皿の片づけや机の清掃も行う。テーブルのなかのところどころ先生用の席が用意されており、先生方も一緒に食事をとりながら、必要であれば園生の介助を行っていた。食事が終わったら先生がひとりひとりに薬を飲ませていく。口を開けて薬を飲ませ、水を飲ませたのち、もう一度口を開けさせてきれいに飲めたかどうか確認する。

食事の量はひとりひとりにあうように調整して配膳しているもので、基本的には完食厳守である。食べ終わったらお茶でお皿を洗い、すべて飲み干すという決まりもあった。朝ごはんは白米、汁物、おかずが三品だった。汁物は、こぼしてやけどをしないためなのか、少しとろみがつけられていて、冷ました状態で配膳さ



れていた。

[朝食後の日中作業はおおよそ次のようである。女性の園生は洗濯、男性はしいたけ原木を担当する。加えて、必要に応じ、ワイナリーでの作業、葡萄園の管理等の作業を行う。昼食時間は、12時から13時半で、外作業の時は外で、寮内で作業した時は食堂で食事をする。その後、午後の作業となり、17時に終了となる。]

### ○洗濯作業

女性の園生は8時になると歯磨きをする。先生が園生ひとりひとりに仕上げ磨きを行う。その後、施設内を移動しながら、洗濯作業を行っていく。この作業に付いている先生は1名である。私は、この作業に参加したが、細かい手順が先生によって異なっていることが多く、統一したほうが良いと感じた。以下大まかな流れを紹介する。

園生らは食堂から洗濯場へ移動し、朝番の先生がすでに回し終わった衣類を取り出す。100人強の洗濯物なので、莫大な量である。業務用の洗濯機（洗濯容量32kgとみられる）3台をそれぞれ2回ずつ回す必要がある。洗濯機に入れられないもの（汚物が付着など）は、当番の先生が手洗いをする。洗濯機から取り出し終わると、乾燥の作業に移る。乾燥機にかけるもの（下着や寝具）と、屋上に干すものに仕分ける。洗濯籠いっぱい洗濯物を、ひたすら運んでいく。屋上への階段は急であるため、転んだりする心配が少ない園生が指示され担当していた。屋上に張られた洗濯紐に、洗濯ばさみでたくさん洋服を干していく。この作業だけで、午前中が終わってしまう。

午後は、大量の洗濯物を部屋ごとに仕分ける作業を行う。まず、洗濯物を屋上と乾燥機から取り込み、仕分け部屋に運ぶ。[洗濯を担当している20名ほどの]園生のうち2人が文字を読むことができる。この2人が、各園生がどの部屋に住んでいるか覚えているので、部屋番号が割り振られたタライに、洗濯物を放り込んでいく。この作業にかなり時間がかかる。タライがいっぱいになったら部屋へ運ぶ。1つのタライにつき大体3往復すると、すべての洗濯物が部屋ごとに仕分けられる。さらにこれをひとりひとりの洗濯物に仕分ける。これも、最終的には先生が部屋をめぐって仕分けしきれているか確認をするので、かなり時間がかかっていた。洗濯作業だけで1日が終わってしまう。作業の間、朝から晩まで喧嘩は絶えない。

### ○原木作業

男性の園生は、朝食後に、全員で食堂の掃除を行う。雑巾で床拭きを行い、その後掃き掃除ができる園

生のみ掃き掃除を行う。掃除が終わったら、歯磨き、トイレ等を10～15分間で済ませ、席について待つ。その後、先生がその日の作業を発表し、各々作業着へ着替え9時半頃から作業へ入っていく。

多くの園生は年間を通して原木作業に取り組んでいる。シイタケ栽培のための原木を運ぶ作業である。木を伐採した山までバスで出向き園に運ぶトラックに積む作業、あるいは園の敷地内にいくつかある置き場に原木をかわるがわる置きなおす作業のどちらかであった。無意味な移動作業にも思える部分があるが、福祉の面〔後述にあるが、規則正しい生活を送り心身のバランスを整えて暮らすことが園生の幸福につながると捉えている〕で見ると、毎日体を動かすために必要であった。そのため、この作業担当の先生方は、毎日どのルートを歩くか頭を悩まされていた。これが、こころみ学園のメインの作業となっている。

人によって障害の度合いが様々なので、作業のペースはまちまち。作業中、先生方は、園生が時間を守れなかったり、注意を聞けなかったりすると叱る。無駄なおしゃべりも叱っていた。

園生は、作業にあたり足袋か長靴を選んで履く。足袋を選ぶ園生は比較的器用で、長靴は自分で足袋をはくことがうまくできない園生が選んでいる印象であった。開設当初から作業は足袋で行っていたようだ。実習生にも足袋着用の指示があったので、人生初の足袋での作業を行った。冬の冷たい山を足袋で歩くと、道の滑らかな感触が気持ちよかった。ところどころに石や木の根が埋まっており、つまずきそうになることもあったが、慣れてくるとそこを踏むのも面白かった。普通の運動靴で作業をするよりも、神経を使ったし、自分が自然のなかに溶け込んでゆく感じがした。ただ、足の裏の疲労感は強く感じられた。わざわざ足袋を履いて作業をするのは、感覚を研ぎ澄ます面、足腰を鍛える面で有効であると感じた。

作業はお手洗いなどの設置されていない野山で行われているので、園生は適宜山中のそこそこで用を足していた。そのような状況に馴染みのない私はかなりショックを受けた。トイレがあるところまで我慢するように指導したりしないということも衝撃的だった。また、用を足した後に手を洗うこともなく作業に戻るの、不衛生な印象を受けた。

原木の伐採も行った。作業に行けるのは毎回5人程度（ほとんど固定メンバー）だった。園から軽トラックに乗って、10分程度の山である。園生の一人がチェーンソーの資格を持っている。彼は、15歳の時に学園に来てから、25年間伐採作業にずっと参加していることを誇らしげに教えてくれた。資格を持っている生徒と、先生2人でチェーンソーを扱う。私も

チェーンソーを持たせてもらい、伐採を試みたが木が思った方向に倒れてくれず苦戦した。

#### ○ワイン作業ほか

こころみ学園を象徴するのは、やはりワインの作業であろうか。参加する園生たちは原木作業に比べて心なしかうきうきしているように見えた。12月の間はワインに関わる作業は全くなかった。3月に訪れた際は、ワインの瓶詰の作業と畑への鶏糞撒きの作業が行われていた。

ワインの瓶詰作業に参加する園生は、朝食後の作業内容が知られるのと同時に発表される。瓶詰の作業に参加するのはいつも決まったメンバーだ。大体毎年同じメンバーで行っているのだと選ばれた園生が嬉しそうに教えてくれた。年長の園生が多いが、それにまじって若い自閉症の園生が1人選ばれていた。作業が始まってみて、彼が選ばれるわけがよく分かった。とても生き生きとしていて、この作業が好きなのだろう。

作業は、工程を細かく分けて行う。瓶をケースから出す、瓶をレーンに並べる、瓶消毒がされているか見守る、ワインがきちんと注がれているか確認する、瓶にラベルを貼る機械を操作する、完成したワインを箱に詰める、等々の作業を、12人程度の園生と、3人のワイナリー職員で行っていた。先に述べた自閉症の園生は、瓶をレーンに並べる作業を担当していた。レーンに並べるとき、瓶が少しずれたりすると、レーンが動くのが遅くなったり、止まったりしてしまう。彼は、まっすぐに瓶を置くのがすごく上手だった。ほかの園生が置いた瓶のゆがみを直したりもしていた。

〔葡萄園に〕鶏糞を撒く作業は、言われたことをこなすことができる園生を順番に呼んでいるような印象だった。鶏糞はトラックで畑まで運ぶ。園から近い畑であれば、園生は歩いて移動する。私はこの作業に参加できていないのだが、参加した園生が夕食時に楽しそうに作業の話をしてくれた。誇りをもって作業に参加しているのだと感じた。

ココ・ファーム・ワイナリーから販売されているワインの中に、「マタヤローネ」と名付けられているものがある。これは、1年のワインの作業を終えた日に、瓶詰が大好きな園生が言った言葉、「またやろうね」からつけられている。園生がワインづくりを誇りに思っていることがすごく伝わってくる。

#### ○作業終了から就寝まで

〔17時半から入浴、以下、女性の場合〕自分で体を洗える子と洗えない子がいる。洗えない子のために先生が1人浴室におり、順番にどんどん洗っていく。脱衣所にもう1人先生がいて、着替えの手伝い（着せて

あげるのではなくて、さっきまで着ていた服と今から着る服がわからない子がいるのでそれを教えてやる）やワセリンなどの薬を塗布したりドライヤーをかけてやったりする。実習生の自分も園生と一緒に入浴をした。

〔18時半から夕食〕朝と同様に、放送が掛かり次第食堂へ集合する。朝の食事より少しメインディッシュが豪華だったように思う。食事、薬が一通り済んだら、男性は食堂掃除、女性は風呂場掃除を行う。その後、集まり（1日の反省会）が男女別に開かれる。反省会では、まず歯磨きを行い、寝る前の薬、体調のセルフチェック、貴重品の確認、翌日の予定の発表がされる。終わり次第おやすみなさいの号令がかかり、各自自室へ戻ってゆく。

〔21時、消灯〕1日の終わり。ほとんどの園生は21時を待たず就寝していた。休日は消灯時間が遅いが、消灯時間まで起きている園生はほとんどいなかった。実習生も疲れてしまってほとんど毎日22時には寝ていた。

以上のようなルーティンで園生は毎日暮らしている。率直な感想として毎日かなり疲れた。外作業ではたくさん急な山道を歩いたので、実習を始めて3日ほどは足がパンパンだった。園生も平然と作業をしているわけではなくて、合図があっても全然部屋から出てこない園生や、途中で泣き出してしまいう園生もいた。

〔こうした日常のほか、年間スケジュールとしてイベントが設けられている。毎月の誕生日会のほか、11月の収穫祭、12月のクリスマスの日、3か月に1回は市内のショッピングモールへの外出などがあり、園生のリフレッシュの機会になっている。〕

#### ○実際に共に作業をして感じたこと

朝、決まった時間に起き、暑い日も寒い日も宿舎を掃除するところから1日が始まる。みんなで並んで食事をとり、肅々と、おだやかに、決まったペースで仕事をする。木に触れ、土を蹴り、体中を使って仕事をする。彼らに合った農作業は、想像以上に体力を使うものだ。しっかり筋肉が動いて、たまには腰も痛くなる。その作業こそが、園生の体づくりを担っている。

日が暮れると本当に真っ暗になる山の中で、また明日の仕事の思い浮かべつつ、程よい疲れに包まれて眠りにつく。知的障害者は昼夜逆転した生活を送ってしまいがちである。学園に来るまで、別の施設でスプーンさえ持たず身の回りのことをすべて人にしてもらっていた人も、家の中で真夜中に大声で叫んでいた人も、心が不安定なためお母さんに力いっぱい噛みついて怪我をさせていた人も、山に触れて、緑の中で、おだやかに自然の中で営みができるようになっていく。



このように、みんなで共に汗を流し、規則正しい生活を行い、心身を穏やかに養う点で、こころみ学園での農業は、生活介護、施設入所支援の目的に添っているといえるだろう。

### 3. おわりに

以上、輪違（2021）のうち、障害者とともに働いた2つの施設での作業内容について、引用・抜粋して紹介した。

前述のように、これら施設は、就労支援施設、介護施設という違いはあるものの、いずれも農作業を就労の基幹におき、農産事業で高い収益をあげている点で共通している。本稿ではこれら施設が、どのように農業に取り組んでいるか作業工程に注目してきた。

そこで明らかになった点は、これらの施設では、多くの障害者が作業にかかわっているが、それぞれ関心があり得意な分野を担当できるように作業が細分化されていることである。また、そうした工夫を凝らす前段として、障害者と施設職員との間でも作業分担がなされている。そもそも農業や農産加工は、他の分野に比較して多くの作業工程から成り立っており、このことが多様な就労の場面を切り出すことにつながっている。両施設は、こうした可能性を最大限に引き出そうとしている施設ということができよう。

また、本稿では触れていないが、両施設とも、それぞれが製造した農産品を販売する独自のルート（ネット販売など）を構築しているなど、農業企業体としてのマーケティング対応も注目される。この点では、むしろ一般の農業経営が学ぶべき内容を提供しているともいえる。

そうした共通点を確認した上で、就労支援施設、介護施設、それぞれの施設における農業への取組として、異なるのは次の点である。障害者および施設職員との関係で、ゆいの里は「働く仲間づくり」としての農業・農産加工、こころみ学園は、生活を共にする「疑似家族のなりわい」としての農業・農産加工という性格をもっていることである。とはいえ、生活のリズムを整える機能を農作業がはたしている点は、やはり共通している。そうした意味で、農業は単なる就労の場にとどまらず、障害者福祉を推進する上で多面的な機能をもっていると考えらるべきであろう。

### 注

- 1) 農業分野における障害者就労をめぐる近年の状況については、香月（2020）を参照。
- 2) 農福連携の諸形態については、契約外形に注目し既存研究および連携事例を紹介した農林水産政策研究所

（2021）第4章「契約外形に着目した農福連携の分類方法と適応法規等に係る特徴および実践事例について」を参照。

- 3) 大澤（2010）、農林水産政策研究所（2011）（2012）、吉田ら（2014）、山藤・香月（2018）、吉田ら（2020）等を参照。
- 4) 農業を就労基幹分野とする愛媛県下の就労継続支援（B型）事業所のうち、「ゆいの里」は福祉由来の施設であるが、農業由来（農業生産法人が福祉事業所を設立）の事例としては、西予市の「百姓百品」グループである「野村福祉園」が高い工賃を実現するなど、その活動が注目される。詳しくは、山藤・香月（2018）を参照。
- 5) 図2に示した2020年度の就労支援事業収入は2,700万円、工賃支払い800万円ほどにとどまっているが、新型コロナウイルス感染症流行前の2018年度には、それぞれ3,400万円、1,100万円ほどであったから、感染症の影響を少なからず受けたと考えられる。特に加工場事業（菓子等）の売り上げが低調だった。NPO法人結いの会『事業報告書』による。
- 6) ゆいの里の概要は引用資料のHPの記事を参考にされたい。
- 7) 「ココ・ファーム・ワイナリー」のブランド構築を分析した論文では、近著に谷本（2020）がある。

### 参考文献

- 農林水産政策研究所（2011）『農業分野における障害者就労と農村活性化—社会福祉法人、NPO法人、農業生産法人の活動事例を中心に—』（農村活性プロジェクト研究資料第3号）。
- 農林水産政策研究所（2012）『農業分野における障害者就労と農村活性化—障害者施設における農業活動に関するアンケート集計結果及び特例子会社の農業分野への進出の現状と課題について—』（農村活性プロジェクト研究資料第5号）。
- 農林水産政策研究所（2021）『農福連携の地域経済・社会への効果と効果的な発揮に関する研究』（連携研究スキームによる研究【農福連携】研究資料第1号）。
- 山藤篤・香月敏孝（2018）「農村地域活性化の課題と展望—愛媛県西予市「百姓百品」の実践から—」『地域活性研究』9, 258～267頁。
- 吉田行郷・里見喜久夫・季刊『コトノネ』編集部（2020）『農福連携が農業と地域をおもしろくする』株式会社コトノネ生活。
- 吉田行郷・香月敏孝・吉川美由紀（2014）「農業分野に本格進出した特例子会社の実態と課題—地域農業の担い手としての特例子会社の可能性—」『農業経済研究』86（1）、12～26頁。

- 輪違典子（2021）『農業に取り組む障害者就労施設の実態』（愛媛大学社会共創学部地域資源マネジメント学科・農山漁村マネジメントコース 2020 年度卒業論文）
- 香月敏孝（2020）「農福連携に関する論点と新たな課題」『農業問題研究』52（1）、23～30 頁。
- 大澤史伸（2010）『農業分野における知的障害者の雇用促進システムの構築と実践』（株みらい）。
- 谷本貴之（2020）「ココ・ファーム・ワイナリーのブランド構築」『立命館経営学』58（6）、79～100 頁。
- 厚生労働省（各年次）『社会福祉施設等調査報告』。
- 日本セルフセンター（HP 記事）「NPO 法人 結の会—自ら栽培するヨモギを使ってさまざまな商品を生み出す「ゆいの里」—」。  
([https://www.selpjapan.net/report/0700/post\\_155.html](https://www.selpjapan.net/report/0700/post_155.html))
- 日本財団（HP 団体情報／団体詳細）「非営利活動法人 NPO 法人 結の会」。  
(<http://fields.canpan.info/organization/detail/1375495775>)
- NPO 法人結いの会（2019～2021）『事業報告書』（平成 30 年度、令和元年度、同 2 年度版）。